

ケチュア語の社会文化的考察

パロミーノ青木 アンヘリカ

一 はじめに

ケチュア *quechua* 語もしくはルナシミ *runasimi* 語は、ペルー、エクアドル、ボリビアでもっとも多く話され、またそれら諸国ほどではないがアルゼンチン、コロンビア、チリでも話されている先住民言語である。

インカ人によって最初に建設された都市がコスコ *Cuzco* (現在のペルーのクスコ *Cusco* 市) である。この都市は神聖な都市と見なされ、インカ世界の中心軸となり、そこを起点として、インカの領土は先述した諸国まで拡大し、四つの大きなスーユ *suyu* (州) からなる帝国を形成した。まさにコスコ (クスコ) は、タワインテインスーユ

Tawantinsuyu (四つのスーユもしくは州) の首都に選ばれたのである。タワインテインスーユはインカ人にとって「世界の四つの部分」という非常に深遠な意味を持ち、その言語がルナシミ語(「人間のことは」)である。ルナ *runa* は人間を意味し、シミ *simi* は言語もしくはことばを意味した。現在では、ルナシミ語はケチュア語と呼ばれる。この名称は「ケスワ *qheswa*」に由来する。ケスワとはアンデス山脈地方の渓谷部を指し、その住民がケスワ・ルナ *qheswa runa* であり、したがって彼らの言語がケスワ・シミ *qheswa simi* であり、それがスペイン語化してケチュア・シミ *quechua simi* に、あるいは単純にケチュア *quechua* 語となったのである。

ケチュア語もしくはルナシミ語は、他の現存する諸言語

と同じように、地方によって音声上や語彙上の差異がある。それにもかかわらず、このケチュア語を話す先住民系の人々のあいだでは、ケチュア語がこれからも存続するであろうし、ケチュア語によって互いに理解し合えるということが強く意識されている。彼らのほとんどは今日では先住民系バイリンガルである。つまり、ケチュア語とスペイン語とを同時に習得するようになっていく。もちろんクスコ県の僻地にはまだケチュア語しか話さない人々がいるし、南隣のプーノ県には三言語併用の人々もいる。なぜなら、ティティカカ湖に近い高原地方ではスペイン語とケチュア語とアイマラ *aymara* 語が共存しているからである。ティティカカ湖はペルー・ボリビアの両国に帰属し、世界でも高地にある湖である。それだけではなく、神聖な湖と考えられている。最もよく知られた伝説によれば、太陽の最初の子どもであるマンコ・カパック *Manco Capac* と *イマ・オクリヨ* *Mama Ocllo* はこの湖の中から出現して、偉大なクスコ市を建設したとされる。この長大な湖にはいくつもの島々があり、ある島ではケチュア語が話され、またある島ではアイマラ語が話されている。

クスコ県のケチュア語は、次の理由により、今日では標

準語と見なされている。つまり、先述のとおりクスコがインカ帝国の首都だったこと、そしてケチュア語が最も輝き頂点に達したところが主としてクスコだったことがその理由である。

アイマラ語はその地理的位置からもボリビアにおけるほうが優勢で、ボリビアではまたアルゼンチンとともにグアラニー *guarani* 語も話されている。グアラニー語はその地理的位置によりパラグアイにおけるほうが優勢である。ペルーより南には、マプーチュ *mapuche* 語があり、主としてチリで話されている。

二 ケチュア語の言語的特徴

ケチュア語は膠着語の一つであり、不変化詞、あるいは接辞 *suffixo* と呼ばれる要素があらゆる語彙に後置され、表現を望ましい形に変化させる。またこれらの接辞は名詞や形容詞、副詞、あるいは動詞の語根に接続することができ、したがってケチュア語表現にとつて必要不可欠な要素となっている。いくつかの例をあげておく(表1)。

最後の例文でもっともよく分かるように、スペイン語で

は長文であっても、ケチュア語では接辞を使用することによって三つの語だけで表現することができる。

ケチュア語のもう一つの特徴は、冠詞を使用しないところである。ただし、不定代名詞の「フク huk」を不定冠詞のように使用することがある。例をあげておく(表2)。

ケチュア語はまた、擬音語が多い言語であり、自然や生活そのものを構成するさまざまな音を模倣する場合が多い。例をあげておく(表3)。

なお、これらの擬音語は、使用方法によっては動詞に変化させることができる。

ケチュア語の最後の特徴として、語形論や統語論にも触れておかなければならないだろう。ケチュア語は語形論や統語論においてはアイマラ語やグアラニー語のようなアメリカ先住民諸語、さらには日本語のようないくつかのアジアの言語に類似している。ここでは日本語と比較した例をあげておく(表4)。

表1 ケチュア語の接辞

ケチュア語	スペイン語訳	日本語訳
<i>noqa</i>	yo	私
<i>noqalla</i>	yo no más	私だけ
<i>noqallata</i>	a mí no más	私だけを
<i>Maria sarata rantin.</i>	María compra maíz.	マリアはトウモロコシを買います。
<i>Mariaqa saratañataqmi rantiyshan.</i>	María se está dedicando a comprar maíz últimamente.	マリアは最近トウモロコシを買うことに夢中になっています。

表2 不定代名詞 huk

ケチュア語	日本語訳
<i>huk llaqta</i>	ある村、ある都市
<i>Huk runas hamusqa.</i>	ある人物がやってきたそうだ。

表3 ケチュア語の擬音語

ケチュア語	音の種類
<i>q'aq</i>	木の枝が折れる音 (カク)
<i>chhaq chhaq</i>	枯葉の上を歩く音 (チャク、チャク)
<i>raqhaq raqhaq</i>	雷の音 (ラカク、ラカク)
<i>ch'all ch'all</i>	雨の音 (チャル、チャル)

表4 ケチュア語と日本語

ケチュア語	日本語訳
<i>makiwan</i>	手で
<i>karrupi</i>	車で
<i>qhatuman</i>	市場へ
<i>noqawan</i>	私と

表5 ケチュア語の語順

主語	目的語	述語	日本語の意味と語順(主語・目的語・述語)
<i>Noqa</i>	<i>runasimita</i>	<i>rimani.</i>	私は、ケチュア語を話します。
<i>Pedro</i>	<i>llamata</i>	<i>rantin.</i>	ペドロは、リヤマを買います。

表6 接辞 *qa*

ケチュア語	日本語訳
<i>Noqaq wasiyqa hatunmi.</i>	私の家は広いです。
<i>Mariaqa sarata rantin.</i>	マリアはトウモロコシを買います。
<i>Mariaqa karrupi qhatuman rin.</i>	マリアは車で市場へ行きます。

次に、ケチュア語の文における語順について、日本語の文と比較した簡単な例をあげておく(表5)。

ケチュア語の接辞の「カ*qa*」は、日本語の助詞の「は」と類似している。いくつかの例をあげておく(表6)。

三 ケチュア語表現の考察

ケチュア語は、生活そのものが自然と一体化した世界において発展してきた。インカ人は、周知のように、自分たちのまわりの自然を崇拜していただけでなく、自然によって、自然のために、暮らしていた。そのような環境の中でケチュア語は育まれ、本質的に話しことばとして発展してきた。

また、インカ人は、天文学、医学、社会経済学、建築学、農学のようなさまざまな科学領域において高度な水準に達した。このことに示されるように、文字を持たなかったけれども、生活に必要なあらゆる知識は、専門家によって運営されたヤチャイワシ *yachaywas* つまり学校において、対話を通じて獲得することができた。

しかしながら、ケチュア語は、スペイン人の到来とともに

に、停滞しただけではなく、多くの語彙や表現を失うこととなる。

論理的なことだが、どんな言語であれ、適切に育まれつづけなければ、近代的な威信言語として発展することはできない。長い歳月が経過する中で、ケチュア語は維持されつづけはしたが、ただそれだけであり、われわれの時代に見合うような近代性を帯びた言語までには育まれなかつた。

この章では、ケチュア語表現のその他の形態について記しておく。

「ケルカイ *qhelay*」というのは動詞の一つであり、線を引く、描く、絵をかく、という意味である。言語学者や一般の人々が提起してきた疑問の一つは、インカ人が作ったラインや絵や図像はなんらかの考えを規定してきたのかどうかというものである。ある意味において、それらの絵は、文字とは認められないけれどもなんらかの概念を表現している。

「キープ *kipu*」は、さまざまな大きさの結び目と色を持つ、紐もしくは繩の集合である。これらは、初歩的な計算方法にすぎないと早計に判断する人もいるが、むしろ高度

な簿記と分類のための精密なシステムであった。そのためには、作成と解読、そして管理のために特別に養成された人々がいた。彼らはキープカマヨク *kipukamayoc* と呼ばれた。さらにキープは、歴史や法律や劇などを記録し、「読み」、伝達するための非常に高度で正確な記憶手段であった。

インカ帝国に到来した最初のスペイン人は、キープカマヨクがキープを解読し、「読む」様子を見て、感嘆の念を隠しえなかつた。それゆえに、キープを破壊しようとする狂信的な宣教師もいた。何か偶像崇拜のように、また悪魔の仕業のように思えたからである。

四 ケチュア語とスペイン語の共存

ケチュア語とスペイン語の関係は、スペイン人がインカの領土に足を踏み入れたときから始まった。

インカ人は、征服されても最初の四〇年間は抵抗を続け、もちろん、新しい言語であるスペイン語を受け入れようとはしなかつた。他方、スペイン人は先住民の言語を懸命に習得しようとした。布教目的のためや、自らの目的にとつ

て役立ちそうなデータを収集するためだったのであろう。
当然のことながら、ケチュア語とヨーロッパ諸語はまったく違っていたので、ケチュア語の習得は彼らにとって非常に困難な課題だった。

インカ人の言語の独特の音を正しく発音することはスペイン人にとって困難だった。ラテン語の文字によってそれらの音を正確に写すことはできなかった。コスコ *Cuzco* にやってきたスペイン人は「*Cuzco*」と発音し筆記した。さらに、彼らにとって発音しやさいように「*Cuzco*」へと変化し、今日ではクスコ *Cuzco* と表記されるようになった。

ドミンゴ・デ・サント・トマス Domingo de Santo Tomás 師は、ピセンテ・デ・バルベルデ Fray Vicente de Valverde 師が一五三八年に連れてきた最初のドミニコ会士の一員としてペルーに到着し、その布教の間にケチュア語を学び、一五六〇年にはスペインのバヤドリーから「インカ人もしくはペルーの諸王の一般言語の文法」というケチュア語の文法書を公刊した。これはケチュア語についてラテン語で書かれた最初の科学的な業績の一つだった。

ケチュア語とスペイン語による文化の普及については、先住民系の年代記者でありイラストレーターでもあるワ

マン・ポーマ・デ・アヤラ Guaman Poma de Ayala の偉業が卓越しており、彼の「新しい記録と良き統治」は、ピーシュマン Pieschmann 博士がコペンハーゲンの王立図書館で写本を発見する一九〇八年まで世界に知られていなかった。彼のイラストの大半はスペイン的なものと先住民的なものの混合を表象しており、その文字もまた同じである。

筆者の考えでは、メステイソのインカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガ Inca Garcilaso de la Vega もまた、この章で述べられている共存の例である。彼は一五四〇年にクスコで生まれ、二〇歳までそこで暮らした。両方の言語に知悉するには十分な時間である。スペインに渡り、スペイン語に磨きをかけ、生まれ故郷を思い出しながら名著「インカ皇統記」を生んだ。

少しずつ、二つの文化の関係と習得が進展していった。例えば、ケチュア語による最初のカトリック要理が生まれ、人々は次のように主の祈りの仕方を学ぶようになった。

「ケチュア語」

Yayayku

Hanapachakunupi kay

Suriyki yupaychasqa kachun.....

〔スペイン語訳〕

Padre Nuestro

Que estás en los cielos

Santificado sea tu nombre.....

〔日本語訳〕

天にましますわれらの父よ

御名の尊ばれんことを……

実際、植民地時代や独立後も、両方の文化や言語の関係には不安定なものがあつた。スペイン語の公用語化により、インカの住民と言語は危機の時代を迎え、ルナシミ語は優勢言語としての地位を失つた。

ケチュア語が自らの領土においてスペイン語と共存していかなければならないことを受け入れるためには、多くの歳月が経過する必要があつたのである。

現在では、相互交流が生まれてきている。一方では、ケチュア語は語彙を増やす必要があり、そのためにはスペイン語から語彙を借用した。いくつかの語彙は元々の性格を維持しているが、接辞や音韻の影響により変化をこうむったり同化されたりしている。特にスペインから伝来した動

表7 スペイン語からの借用語

スペイン語から	ケチュア語へ	文例
carro	<i>karru</i>	<i>Karru hamushan.</i> [Viene un carro. 車が来ます]
tren	<i>tren</i>	<i>mosoq tren</i> [un tren nuevo 新しい列車]
tren	<i>tren</i>	<i>Trenpi hamuni.</i> [Vengo en tren. 私は列車で来ます]
vaca	<i>waka</i>	<i>noqaq wakay</i> [mi vaca 私の牛]
caballo	<i>kawallu</i>	<i>Kawalluqa uñayoy kashan.</i> [El caballo tiene un crío. その馬には子馬がいます.]
computadora	<i>computadora</i>	<i>allin computadora</i> [una buena computadora よいコンピューター]

表8 ケチュア語からの借用語

ケチュア語から	スペイン語へ	日本語の意味
<i>kancha</i>	<i>cancha</i>	サッカー場などの囲まれた場所
<i>chakra</i>	<i>chacra</i>	畑
<i>kiwna</i>	<i>quinua</i>	キノア (栄養の豊かなアンデスの穀物)
<i>wik'uña</i>	<i>vicuña</i>	ビクーニャ (ラクダ科の野生動物、毛を利用する)

物の名称のような場合である（表7）。

他方、多くのケチュア語の語彙がスペイン語の中に取り入れられた（表8）。

五 二〇・二一世紀におけるケチュア語の文字

と教育

1 文字の統一の重要性

インカ時代には、無文字言語の使用が可能であった。多様な地理的階梯を占有し相互依存的な農業や牧畜に従事しなければならなかった異なる民族集団の間ではコミュニケーションを日常的に継続することが必要だったからである。今日ではそれらの民族集団はいまだに自らの言語を維持してはいるけれども、互いに分立して新しい国々を形成し、さまざまな政策を採用している。したがって、つねにコミュニケーションするという習慣がなくなった。だから、ケチュア語を使用するあらゆる民族集団が、あるいは各国の代表が一堂に会して諸条件を、例えば文字の統一を決定するようなことは困難になっている。

四五〇年前から、ケチュア語の口頭伝承の収集や文法の

研究、宗教的・政治的・詩的な文章表現が実践されてきた。それらはユニークさと豊かさにより文字に書かれて普及していったが、作家たちが常に直面した最大の困難の一つがインカの言語の特徴である帯気音や破裂音を正確に表記することであった。

すでに二〇世紀のなかばには、最初にポリビアでケチュア語とアイマラ語が国家語であると宣言された。これは決定的な一歩だった。ペルーでは、一九六〇年代末のことであり、ファン・ベラスコ・アルバラード Juan Velasco Alvarado 大統領の政権（一九六八―七五年）が先住民とその言語のための新しい諸改革を断行した。その一つがケチュア語を公用語化し、基礎アルファベットを作成するというものであった。何年かが経過し、一九七五年には五月二七日付で政令第二一五六号が發布され、その結果、次のようなアルファベットが公布されたのである。

母音は、五つの母音（a, e, i, o, u）から構成される。これらの母音については融通性があり、三つの母音（a, i, u）だけを使用することもできる。

子音は、一六の子音（ch, h, k, l, ll, m, n, ñ, p, q, r, s, sh, t, w, y）から構成される。

表9 ケチュア語の子音の特殊な発音

平音	ch	k	p	q	t
帯気音	chh	kh	ph	qh	th
破裂音	ch'	k'	p'	q'	t'

それらのうちの五つの子音についてはそれぞれ二つずつ子音が派生しており、ケチュア語独特の音を表わしている。ここから、次のような三種類の子音が生まれだ(表9)。

クスコのケチュア語学会は二〇世紀の最初の頃から存在するが、このアルファベットの使用を承認し認可した。そのとき以来、新聞でも、ペルーやボリビアの大半におけるケチュア語教育でも使用されてきた。エクアドルは独自のアルファベットを有しているが、あまり差異はない。

2 ケチュア語の教育

クスコのケチュア語学会とは別に、新しい教育機関が設置された。その一つがクスコのカトリック系のアンデス司牧研究所 Instituto de Pastoral Andina de Cusco であり、一九七六年から国内外の

聖職者を対象にケチュア語教育を開始した。彼ら聖職者は、ケチュア語圏の農村で司牧活動に従事するためにこの言語を習得する必要があった。八〇年代以降には、彼らに加え、さまざまな分野の専門家や研究者、人類学者が、国内外から参加するようになり、インカの言語を習得しようとして、夏期コースへの参加者の層を厚くした。夏期コースは、ペルーの学校が休みになる毎年一月と二月に実施された。

隣国のボリビアでは、ラパスとコチャバンバの両都市にケチュア語を学習するセンターがある。さらに、エクアドルや、その他ケチュア語が話されている国々でも、それぞれ独自の教育機関が存在する。

大学では、学生が専攻する学部や課程に応じてケチュア語が必修科目や選択科目に指定されている。

ケチュア語の教育は拡大傾向にあり、今ではラテンアメリカだけではなく、米国のような諸外国でも教育されている。米国では好評を博し、いくつかの大学では言語教育の中の科目の一つとなっている。ミシガン大学では通常のコースと集中コースがあり、さらに夏期コースのためにはクスコと協定を結んでいる。カリフォルニア大学にも夏期

コースがあり、その他ウイスコンシン大学は夏期コースのための協定をエクアドルと結んでいる。

日本ではまだ、大学で学ぶ外国語科目の仲間入りを果たしていない。しかし、ケチュア語に関心を示し学んでみたいという日本人は少なくない。好奇心からの人もあれば、アンデスの魅力的な歌を歌えるようになりたい人や、自分の専門のために学んでいる研究者や言語学者もいる。筆者自身は、ペルーでも日本でもケチュア語教育の経験があり、その経験は常に満足のものだった。一九八五年にはじめて日本に来て驚いたことは、インカの言語を学びたいというたくさんの人に出会えたことである。現在では、毎年半期のあいだ、奈良大学で史学科や文化財学科の学生たちにケチュア語を教える機会を得ている。学生たちは驚くくらい正確にケチュア語を発音してくれる。そういうとき、筆者は誇りに思うとともに満足感に満たされるのである。

3 二言語教育

二言語教育については、ケチュア語モノリンガルが優勢な農村圏において適切な教育の推進役を担ってきたのは各種のNGOである。ペルーをはじめとするスペイン語圏の

国々ではどこでも初等・中等の義務教育は公用語かつ優勢言語だったスペイン語で行われてきたことを考え合わせるならば、さまざまな先住民農村の生活実態に見合った教育を求めて闘うことは容易なことではなかった。

ペルーでは、一九八〇年代からは教育省による教員の養成や、二言語教育用の適切な教科書の作成が試みられるようになった。その事業は次のような手順で発展した。つまり、低学年の生徒は最初のうちは彼ら自身の母語である先住民言語で教育され、スペイン語は科目の一つとして、つまり第二言語として教えられる。学年が上がるにつれて、授業は両方の言語で行われるようになり、初等教育の最終学年までには、生徒は通常のスペイン語による教育へと編入される。これにより自らの言語や文化を失うことがなくなつたのである。このような二言語教育はペルーでは主としてプーノ県やクスコ県で実行されてきた。一九九〇年代には、ボリビアのラパスとコチャバンバの両県で同じようなことが実行されるようになり、特にコチャバンバのサンアンドレス大学には現在では二言語教育専攻の修士課程が設置されている。

今日では、このように二言語教育が普及し、エクアドル

でも実施されるようになってい。こうして、ケチュア語モノリンガルの生徒も、アンデス諸国のその他の先住民言語のモノリンガルの生徒もまた、短期間のうちにスペイン語とのバイリンガルつまり二言語併用者になるだろう。

六 今日のケチュア語社会

1 人口

今日のケチュア語人口は約一〇〇〇万にのぼる。これは、大体五年ごとに各国で実施される国勢調査から推定したものである。インカ時代の人口は、大体一〇〇〇万くらいだった。このデータは一次史料の研究に基づいて、家屋の数や一軒当たりの住民の数から推測されたものである。例えば、マルティン・デ・ムルア Fray Martín de Murúa 師の著作がある。彼は一五八五年以前にペルーにやってきて、『インカ諸王の起源と系譜』という年代記の中でクスコ市について次のように触れている。「この都市は一〇万軒からなる町であり、各家屋には二ないし三人の住民が暮らしていて、一〇人にのぼることもある。そして五日ごとにクシパタと呼ばれる大きな広場では市が立つ。この広場は一〇万

人を収容できる。」

その当時から今日までに生じた変動にもかかわらず、ケチュア語人口は変化しなかつたということが出来る。しかし、今日ではケチュア語は単独で存在しているのではなく、主としてスペイン語と共存している。その結果、次のような集団が出現している。

- ① スペイン語モノリンガル
- ② ケチュア語モノリンガル

③ ケチュア語・スペイン語バイリンガル

④ 受動的バイリンガル

彼らは、ケチュア語を理解はするが話すことができない人々か、反対に、スペイン語を理解はするが話すことができない人々である。

⑤ 「隠れ」バイリンガル

彼らは、何らかの理由によりケチュア語を話せないか、あるいは話したくない人々である。

⑥ トリリンガル

彼らはケチュア語とスペイン語に加えてアイマラ語やその他の先住民言語を話すことができる人々である。筆者が尊敬するバイリンガルの一人は有名な著作家のホ

セ・マリア・アルゲータス José Maria Arguedas である。彼は、自らの小説を通してケチュアの文化や言語の真髄をペルーや全世界に広めることができた。

2 ケチュア語のメディア

①新聞

さまざまな新聞社が定期的に教育をテーマとした冊子をケチュア語で発刊している。

②テレビ

テレビは、週に一度アンデス地域の典型的な音楽や伝統的な舞踊の番組を提供している。

③ラジオ

ケチュア語のニュースや教育番組、音楽やインタビュを毎日放送している多くのラジオ放送局がある。クスコ県でもっとも聴取されているのは「インティライミ」ラジオ局で、朝の四時から昼の一二時までケチュア語で音楽やニュース、コマーシャルや教育番組を流している。そのあとは午後五時までスペイン語で放送する。それ以後はケチュア語とスペイン語でかわるがわる放送するのである。

④電話およびインターネット

都市近郊のケチュア系農村ではすでにあらゆる種類の電話があり、Eメールではケチュア語で書いたメッセージを送ることもできる。

3 習俗と宗教

ケチュア系の農村では、都市から遠ければ遠いほど、それだけ多く過去からの習俗が保存されている。一般的に、人々は農業や牧畜に従事しており、インカの祖先たちのように自然と一体化して暮らし、「盗むなかれ、忘れるなかれ、嘘をつくなかれ *ama suwa, ama qella, ama llulla*」というインカの戒律を忠実に守っている。

八月には、種時きが始まる前に、パチャママ *Pachamama* と呼ばれる大地の母に感謝するために先祖伝来の儀礼を行うことが習慣となっている。四月や五月の収穫の時期にたくさんの収穫がありますように、と祈るのである。同じように、アルパカや羊の毛刈りをする前には、アプ *apu* と呼ばれる聖なる丘や山の神々に感謝し、許可を得るための儀礼をとりおこなう。動物の世話をし守ってくれるのはアプたちだからである。

農作業でいまだに存続している習慣の一つはアイニayni と呼ばれる互酬労働、つまり「今日は私が君のために働き、その代わりに明日は君が私のために働く」というものである。四月や五月にはトウモロコシを収穫するが、収穫の最後の段階では、サンク *sankhu* と呼ばれる、煎って粉に挽いたトウモロコシのデザートをこしらえることが習慣となつてゐる。それを食事と一緒に給仕してその日の共同作業を終るのである。

ジャガイモの収穫の時には、これも五月に行われるのであるが、ワテイア *watia* と呼ばれる野外料理をする習慣がある。収穫したその地面でジャガイモを料理するのである。だから独特の味がして美味でもある。

一般に、アイユ *ayllu* と呼ばれるすべての農村では、どんなに辺鄙なところにあつても、住民はキリスト教徒で、その大半がカトリック教徒である。彼らは日曜日にはミサに行き、宗教的な祝祭を祝う。ミサはケチュア語かスペイン語で行われ、人々はケチュア語かスペイン語で折り、歌う。両方の言語の賛美歌があるのだ。ケチュア語の歌は表現豊かで感傷的であり、最も有名な曲の一つが、悲しみの聖母マリア像のそばで聖金曜日に歌われるという次の曲で

ある。

〔ケチュア語〕

Haku mamay

Puririsun

Wawaykita maskhamusun

Orqo q'asanta……

〔日本語訳〕

行きましょう、聖母マリア様、

出発しましょう、

御子イエス様を探しに行きましょう、

山を越え、谷を越えて……

4 祝祭と娯楽

ケチュア語を話す人々は、確かに貧しい生活を送っているけれども、誰も悲しんだり孤独を感じたりすることはない。もちろん金銭的な富という考えも持たない。しかし、インカやキリスト教の祭礼を盛大に祝つて楽しむことが好きだ。それらは一年中非常にたくさんあり、そのためには家族や友人、そして隣人が集まって、宴会を開くだけでよい。食べ物や飲み物を欠かさず、気ままに、気兼ねなく音

楽をかける。いくら騒(うら)いと、誰にも迷惑をかけないし、反対に人々がワイエスタに加わってくるくらいである。

家族の誰かの誕生日のときにはとりわけ盛大に祝福される。コウィ・カンカ *gowi kanka* と呼ばれるクイ「モルモツト」の丸焼きのような伝統的な料理をこしらえ、サラ・アハ *sara aha* と呼ばれるトウモロコシのお酒を飲む。このお酒はインカ時代からたしなまれ、当時は聖なる飲み物と見なされていて、インティライミ *intiyami* のような太陽の祭りではタイタ・インティ *Tayta Inri* つまり父なる太陽神に献上されたものである。今日では、このお酒の製造とともにインティライミの祭りもまた挙行され続けている。

踊ったり歌ったりするためには、もちろん伝承されてきたものから最新のものまでさまざまな歌や踊りがある。

カスワ *qhaswa* と呼ばれるカルナバルの踊りやワイノ *wayno* と呼ばれる山岳部の歌謡、ワイラス *wayas* として知られる激しい舞踏、そしてマリネラ *marineras* のようにスペインから伝わった踊りなどがある。最後に、カルナバルで人気のある曲を紹介しておく。

〔ケチュア語〕

Pukllaysi chayamun pukllay

Pukllarikunapaq pukllay……

〔日本語訳〕

もうカルナバルがやってきたそうだが、
さあ楽しみましょう……

七 おわりに

ケチュア語とその他の諸言語の関係や共存は、文化的にも精神的にも豊かさを生んできた。そのことを筆者は誇りに思う。

ラテンアメリカはほんとうに楽園のようなもので、自然は格別だし、過去においても数多くの民族集団の揺籃の地であった。この地域では多様な文化が発展をし、その足跡が今なお残っている。それら民族集団は生活形態が違ったり、話す言語が違っている、共生することを知っているし、さまざまな文化を発展させてきた。私たちは今日までそれらの文化を継承してきたし、私たちにとって恒久的な財産となっている。多様な言語もまたその財産の一部を構成しているが、残念なことに、それらの多くはさまざまな理由により消滅し、それとともに消滅してしまった習俗や文化

も多い。しかしながら、今日でもなお、まだまだ多くの先住民言語が存続しているし、良好かつ安定した状態にある。将来のことを予想するならば、ケチエア語はけっして衰弱したり死滅したりすることはないだろう。人々が毎日活発にケチエア語を話し続ける限り、ケチエア語は栄養を摂取しつづけ、未来永劫に生き続けるであらう。

参考文献

- Angles Vargas, Victor, *Historia del Cusco*, tomo 1, Cusco, 1979.
- Cusihuaman G., Antonio, *Gramática quechua: Cuzco-Collao*, Lima, 1976.
- López, Luis Enrique, ed., *Pesquisas en lingüística andina*, Lima-Puno, 1988.
- Middendorf, Ernest W., *Gramática Keshua*, traducido por Ernest More, Madrid, 1970.
- Ortiz Rescaniere, Alejandro, *El quechua y el aymara*, Madrid, 1992.
- Palomino de Aoki, Angélica, "Runasimi I: Manual de Quechua Cusqueño", *Documentario de América Latina*, no. 26, pp.1-83, 1993.
- Pino Duran, A. German, *Runasimi: Lecciones teórico-prácticas del idioma incaico*, Concepción, 1980.

後記

本稿は、「スペイン語世界のことばと文化 講演録 二〇〇七年度版」(京都外国語大学スペイン語学科編、二〇〇八年三月)所収の拙稿「*una visión sociocultural del idioma quechua*」に若干の補筆を加え、日本語に翻訳したものである。なお、本文中のイタリックの部分はケチエア語を表わす。

(日本語訳 青木芳夫)